

## まわり道もわるくない

～「今までの自分」が「今の自分」を輝かせている～

ダイニング・バー 「ティファニー」  
バーテンダー 小長 紀子さん

男性だから、女性だからということ意識して仕事をしたことはありません。  
バーテンダーの世界は、男性も女性も関係ありません。自分にあった生き方をすればよいと思います。

## ■バーテンダーになったきっかけ



短大卒業後、色々な職業を経験してきました。バーテンダーを目指していたわけではありません。カクテルバーが好きで、ある日お店が忙しい時に手伝ったのがこの仕事に入ることになりました。  
昼間働きながら夜手伝っているうちに面白さを知り、本格的に作りたと思うようになり、そして、これが本職になりました。自分が興味ある仕事にたどり着くまで

## ■バーテンダーコンクール

コンクールは、学科試験と実技試験があります。出場する意味を考え込んだり、練習にお金がかかるからとやめてしまえば、何も得ることはありません。コンクールへの挑戦は、練習を重ねることであり、技術の向上させます。また、他の支部の人と交流が出来ることは楽しみでもあり、良い刺激となります。  
まだまだがんばりますよ。後悔したくないので、今でき

## ■壁にぶつかったのは

少し時間はかかりましたが、このまわり道が今の職業にとっても役立つっているんです。

## ■心がけのmotto

「来て良かった」「また来たい」と思って貰える空間を作ること。ここで、時間と空間を楽しんで貰いたいです。

押しつけがましい接客ではない、お客様の世界を邪魔しないよう、「壁」になる部分もあるのです。オーダーを取るタイミングの計り方を大事にしています。難しいですね。カクテルの味についても、お客様の好みに応じられるよう、努力しています。  
まわり道と聞いていた時間の中で、貴重な経験を重ねてきていたんですね。

## ◆「ティファニー」マスター

安達 修治さんのお話

この仕事は、向き不向きのある仕事で、素質が必要だと思えます。教わるのではなく覚えるものです。

「格好いい」では続かない。お酒を創るのは仕事の一部で、その他の仕事の方が多いのです。

## 思いきって転職

家族の協力があってこそ

大分市東院の葛城 修二さん  
朋子さん ご夫妻

自らの意思で長年勤めた会社を辞め、「無花果（いちじく）」の栽培で、第2の人生のスタートを切った大分市東院の葛城修二さん朋子さんご夫妻にお話を伺いました。

## ●無花果（いちじく）栽培との出会い

5年前、知人から「無花果」の苗を10本もらい、育ててみました。ちょうどその当時、減反に伴う休耕田の活用を考えていた時で、以前から果樹栽培に興味を持っていたこともあり、2年間は会社勤めのかたわら栽培していました。

## ●希望と不安の中で

次第に「無花果」栽培に楽しさや喜びを感じ、会社を辞めて本腰を入れて始めてみようか、という気持ちで、心の中を占めていくようになり、しかし、その胸の内をなかなか家族に明かすことができず、一年の月日が流れていきました。それはやはり、自分にとって、初めての大きな挑戦だったからだと思います。希望と不安が入り混じり、夜も眠れない日々が続きました。ある日、思い切って家族に胸の内を話したところ、意外に

## ●夫婦二人の共同作業

「無花果」栽培は、思いの外天候に左右されやすく、日々の温度調節と水の管理が収穫に大きく影響してきます。最初はやはり苦労が多かったですね。今は、土作りや木の手入れにも力を入れた結果、多い日には、一日に1000個の実を収穫出来る日もあります。



## ●夢をつなぐ

現在、大分市の「無花果」の生産量は、九州で一番多く、市内には50人程の生産者の方々がいます。今後の課題は、いかに品質の良いものを早く、安定的に出荷できるか、又、生産コストをどの位下げられるかにあると思います。それには、仲間同士の連携を深めて、技術の向上を図り、若い人達にも参加を呼びかけたいですね。健康にも恵まれ、家族の協力もあり、なんとかこれまでやってこれました。今後も体力の続く限り「無花果」栽培に力を注いでいきたいですね。